

# 大学図書館における資料の組織化

大 城 善 盛

## 1. はじめに

大学図書館は大学の研究・教育機能を支援すべく資料を選択・収集し、蔵書を構築している訳であるが、蔵書の有効利用を計るためには、資料は一定の体系の下に組織化されなければならない。資料の組織化は、収集した資料の物理的組織化と資料を検索するためのツールの組織化に大別して考えることができる。

図書館で組織化という場合、通常、検索ツールの組織化、すなわち、目録と分類を指すごとく理解されているが、分類が資料の物理的組織化(配架)と検索ツール(分類目録)の両機能を備えているがために、そのような理解の仕方が一般化しているように思われる。この小論では、資料の組織化は配架、目録、分類を意味するものとして論を進める。<sup>(1)</sup>

## 2. 資料の物理的組織化

### 2. 1 形態別組織化

図書館資料の中でも伝統的に中核的位置を占めてきた図書館の物理的組織化は、18世紀末以後サイズ別・受入順配架から主題別配架への歴史を辿っていて<sup>(2)</sup>、わが国の大学図書館も現在ではNDC(日本十進分類法)に基づいた主題別配架をしている。受入順配架から主題別配架へ変わってきた背

景には、図書館に対する考え方の変遷がある。すなわち、資料の「管理・保存」中心の考え方から「利用」重視への変化である。

しかし、現代の大学図書館が所蔵する資料は形態的に多様化しており、図書、逐次刊行物、地図等の伝統的印刷メディアはもとより、マイクロ資料、録音資料、機械可読データ・ファイル等も蔵書の重要な部分を占めるようになってきている。それらの資料は主題より形態を優先させ、別置の形で組織化した方が保管、利用の両面で便利である。

まずマイクロ資料について考察すると、a) 原資料の入手が困難である、b) 収容スペースの軽減になる、など大学図書館によって収集理由は異なるが、その種の資料が特に研究者に重要になってきていることは確かである。マイクロ資料はマイクロリーダーなしには利用できないこともあって、新築の多くの図書館が特別施設を設け、別置の形をとっている。関西大学や京都産業大学のように、コンテナ・サーバー・システムと称する自動出納保管庫を設置している大学図書館もある。

録音資料や映像資料については、オーディオ・カセットやビデオ等のテープ形態と CD やレーザー・ディスク等のディスク形態の2種が主流になってきている。いずれも印刷形態とは異なった保管、取り扱いが要求される。利用の際には再生機器が必要であり、そのことを考慮した組織化を計らなければならない。金沢工業ライブラリーセンターでは、利用者が資料番号を入力すれば音声画像情報を自動的に提供する KIT-AVIS (KANAZAWA INSTITUTE OF TECHNOLOGY AUDIO-VISUAL INFORMATION SYSTEM) を導入した「AV コーナー」を設置し、1991年6月現在、約2千点のビデオ・カセットと約千点のオーディオ・カセットを収容し、利用者サービスに努めている<sup>6)</sup>。

また、京都産業大学では、1987年の中央図書館新築を契機に視聴覚室を設け、専任の職員2人を配置している。そして、現代の学生のメディア感

覚的確に把握し、映像文化の時代に見合った視聴覚メディアの収集、サービスに努めている。収集範囲は一般教材はもとより、音楽、映画、演劇、美術、ドキュメンタリー、スポーツ、語学等と多岐にわたり、1991年3月現在映像資料約3300点、（その中、レーザー・ディスク約500点、ビデオ・テープ約2800点）、オーディオ資料約3900点、（その中、CD約800点、カセット・テープ約2900点、LP約200点）を所蔵している。視聴覚室も個人用ブース室とグループ室（3～5人用3室、6～20人用2室、20人以上用ホール）の2種を設け、最も利用の多いサービス部門の一つとなっている<sup>(4)</sup>。

録音資料や映像資料の収集及び組織化に関しては、LL (Language Laboratory) センターをもっている大学において特に大きな課題に直面する。すなわち、両機関でその調整をどう計るかという課題である。調整の難しさから、A-V資料に関しては消極的な大学図書館も多い。その課題に対する一つの解決策を、同志社大学は提示している。

同志社大学では、図書や雑誌等の印刷メディアだけが学術情報でなく、情報化社会においてはテレビやビデオなどの映像情報やデジタル情報などのマルチメディアも学術情報として重要であるという認識の下に、1991年に大学図書館、計算機センター、視聴覚室(LLセンター)を統合し、「学術情報センター」として発足している。同志社大学のような規模の大学において、大学事務の機械化も開発していかなければならない計算機センターと図書館を統合するのは同志社大学が初めてであり、大きな試練であると思われるが、少なくともA-V資料に関しては、全学的調整という点から極めて参考になる解決法と言えるであろう。

逐次刊行物の物理的組織化については、主題分類をして図書と混配している大学図書館と、独立の雑誌室を設け分類はせず、誌名順に配架している大学図書館がある。主題分類をして図書と混配すると、同一主題の文献

は形態の如何に拘らず集中化するので、ブラウジングの際に効を奏する。しかし、大学図書館における逐次刊行物の年間増加量は一般的に相当高く、書架スペースの効率的利用という観点からは、逐次刊行物の主題別配架は難点をもっており、推奨できない。また、小数の専門誌を除けば、逐次刊行物のカバーする主題範囲は相対的に広く、主題別配架をしたとしてもブラウジングにどのくらいの有効性をもつか疑問も残る。

大学図書館における逐次刊行物に関しては、誌名順配架が最も効果的であるように思われる。しかし、その配架法においても問題がない訳ではない。誌名順配架は、当然のことながら同一主題の文献が逐次刊行物であるという形態的理由で図書とは別のところに（往々にして、異なった階に）配架され、アクセスに時間がかかるという欠点がある。また、別誌名や異誌名をもつ雑誌、もしくは一般的名称のみからなる雑誌の場合、利用者は図書館が決めた誌名（すなわち、配架誌名）で探すとは限らず、書架に配架されていても見つからないということが起こり得る。代本版（ダミー）を使用することによりある程度解決はつくものの、代本版が役に立たない場合もある。例えば、『調査月報』という逐次刊行物は『日本雑誌総覧1988年版』（出版ニュース社 1987）によると、現在でも8団体から刊行されており、終刊もしくは休刊になっているものも含めると20点以上存在するであろう。その種の雑誌の参照作成は容易でない。

主題別配架、誌名順配架のいずれを採用していようと、通常、大学図書館ではバックナンバーは閉架書庫に保管している。そして、最近刊行された雑誌については、雑誌のもつ特性、すなわち、情報の速報性や利便性を生かすべく開架雑誌室（もしくは、雑誌コーナー）を設け、利用頻度の高い雑誌を選定し、そこに配架している。また、主題分類をしている大学図書館でも、開架雑誌室に配架する雑誌は誌名順（もしくは、大まかな主題の下で誌名順）に配架しているところが多い。

しかし、多くの大学図書館に見られる開架雑誌室の運用形態については、解決しなければならない課題が存在する。それは、選定法に関する課題である。収容スペースには限りがあり、開架雑誌室に配架する雑誌の選定は慎重さが要求される。そして、利用者にも納得のいく説明ができるような選定法でなければならない。そのためには、所蔵するカレント雑誌全般の利用状況を把握する必要がある。しかし、利用状況の調査は必ずしも容易でないので、現実には図書館員の経験に基づく勘に頼っている状況である。真に大学図書館サービスの向上を計ろうとすれば、勘ではなく、実証的データに基づく選定法を実施すべきである。

## 2. 2 閉架制と開架制

資料の物理的組織化を利用者の資料へのアクセスという観点から捉えると、閉架制と開架制が存在する。大学図書館の機能を歴史的にみると、初期の機能は文明の記録である資料を収集・整理・保存し、学問に役立てることであった。教育を支援する機能はあまり重視されていなかった。そのため、大学図書館は研究者志向のサービス体制を組み、学生へのサービスを疎かにしてきた。その名残りが閉架制である。

閉架制という場合、概念的にはすべての利用者に対して書庫への入庫を許可しないことを意味し、初期の頃はそのような大学図書館も一部存在した。しかし、現代の大学図書館においては、閉架制という場合、研究者や大学院生の入庫は許すが、学部学生の入庫は特別の理由がない限り許可しないことを意味する。アメリカでは、現代の大学図書館は研究、教育の両方とも等しく（同じ比重で）支援する機能を負わされているという認識の下に、殆どの大学図書館が閉架制を止めて開架制に切り換えている。

開架制は、通常形態により完全開架式と安全開架式に分けることができる。完全開架式とは、閲覧スペースと書架スペース（書庫）は区切られて

おらず、書庫への出入りが学生でも自由である開架法を意味し、他方、安全開架式とは、書庫への出入りの際に何らかのチェックを行う開架法のことである。完全開架式を採用すると資料の紛失が多くなるという理由で、安全開架式を採用している大学図書館があるが、ブック・ディテクション・システムを導入することによりその心配はなくなる。そのシステムの初期導入コストは安くはないけれども、チェックを行う人件費を考慮すると、極めて対費用効果のあるシステムであり、現在では一般化しつつある。

また、全蔵書（貴重書や特殊資料は除くことになるが）に対して直接アクセスを許可するか、それとも、部分に限るかによって、全面開架制と部分開架制に分けることができる。学生へのサービスを重視する国際基督教大学は図書館創設当初から全面開架制を採用し、わが国の大学図書館の開架制のモデルになっている<sup>9)</sup>。現在では、筑波大学や宮崎大学をはじめ、100以上の大学が全面開架制を採用し、全面開架に近い大学も慶応義塾大学や琉球大学の他、100近くを数える至っている<sup>10)</sup>。

以上のように、今日では学生への蔵書開架率は高くなってきている。しかし、わが国では依然として過半数の大学図書館が蔵書の大半を閉架書庫に置き、学生の直接アクセスを拒んでいる。学生を拒む理由として、次のようなことが一般的に言われている。

- 1) 学生は大学図書館が所蔵する膨大な資料のうち、一部しか利用しない
- 2) 学生を書庫に入れると、資料の紛失が多くなる
- 3) 学生を書庫に入れると、書架が乱れる

上記の3点を検討すると、1)に相当するくらい膨大な資料を所蔵する大学図書館はわが国にはそう多くなく、2)はブック・ディテクション・システムを導入することにより、最小限にくい止めることが可能になって

いる。職員の恒常的不足傾向とあいまって、大多数の大学図書館が学生を拒む大きな理由は、「3」書架が乱れる」であるように思われる。大学図書館の究極の目的は研究者と学生へのサービスであることを考えると、特殊資料は除くとしても、その他の一般的蔵書に対しては、金沢大学の中央図書館に例をみるごとく、少なくとも安全開架式を採用していくべきである。

「戦前の図書館と戦後の図書館の運営上の大きな相違は、開架制の有無である」と岩猿氏が指摘するように<sup>(7)</sup>、わが国の大学図書館も決して学生を軽んずることなく、戦後はそれなりの努力をしてきている。学部学生のための開架図書室の設置は、その努力の証の一部である。学生の知的活動を刺激する最善の方法は、所蔵する資料を学生が直接見、そして、直接手に触れさせることであることを考慮すると、開架図書室の設置は学生へのサービスに対する大きな改善であったと言えるだろう。

開架図書室に置く資料の冊数については、学生の利用が予測される資料は可能な限り開架図書室に配架することが望ましいが、文部省の「大学図書館施設計画要項」は5万冊以内を目処にしている<sup>(8)</sup>。しかし、その基準は20年前のものであり、また、その算定法に実証的裏付けがある訳でもない。学生の利用調査等を施して検証すべく、わが国の大学図書館が抱えている課題の一つである。因に、新築の中央図書館をもつ大学図書館を調べてみると、鶴見大学約10万冊（学生数4千人）、名城大学約6万冊（学生数1万4千人）、京都産業大学約10万冊（学生数1万2千人）、関西大学約10万冊（学生数2万人）を学生用として開架図書室に配架している<sup>(9)</sup>。

関西大学の開架図書室の資料は、講義内容にも即応すべく、講義要項に掲載されている参考文献、ゼミ、卒論のテーマに関連する資料に留意し、学習用基本図書、基礎的専門書、教養書、雑誌、新聞等から構成されている。学生の利用実態を調査して、利用の集中する資料は複本も揃えてい

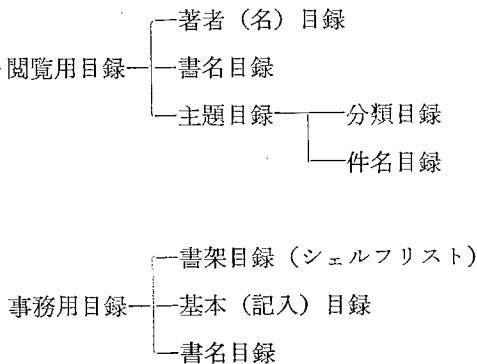
る。また、研究用として閉架書庫においてある資料で、学生の利用頻度が高いものは学習用図書としても購入している<sup>69)</sup>。

### 3. 検索ツールの組織化

#### 3. 1 目録

資料の効率的な組織法の一つとして目録の整備があるが、目録の機能は歴史的にみるといくつかの変遷を辿っている。財産台帳から出発し、ファインディング・リスト機能を経て、現在では多様なアクセス・ポイントを有する検索のツールとして理解されるようになってきている。そして、目録の機能は一般的に、a) 特定文献、b) 特定著者の著書（文献）、c) 特定主題に関する文献、を検索可能ならしめることと理解されている。

目録を類型化すると、おおよそ次のようになる。



上記の類型化は、伝統的な目録形態、すなわち、カード目録を機能的に捉えた目録の基本型であり、実際に編成される閲覧用目録は、「著者・書名目録」であったり、「辞書体目録」であったりする。また、このような類



型化も目録が目に見える形で存在するから可能であり、オンライン目録が普及すると上記のような類型化は不可能になり、その意義もなくなる。わが国の大学図書館の目録はオンライン目録に移りつつあるけれども、現在なおカード目録が優勢である。それ故、以下ではカード目録環境におけるわが国の大学図書館の著者（名）目録や主題目録の抱えている問題点を指摘し、次にやがて一般的になるであろうオンライン目録について触れ、最後にコンピュータ時代における目録作成について考察する。

### 3. 1. 1 著者（名）目録

著者（名）目録は、a) 図書館が特定の著書（文献）を所蔵しているか、または、b) 特定著者のどのような著書（文献）を所蔵しているか、を検索可能ならしめるために作成される。b) を可能ならしめるためには、ある著者が表示形もしくは読み方のいずれかにおいて2種以上の名称をもつ場合、統一形（統一標目）を決め、その標目の下に目録記入を作成する必要がある。その際、参照が不可欠になる。もしくは、中島梓のように活動分野によって名前を使い分けている場合、それぞれ独立の標目を作成する。その場合、相互の参照を作成する必要がある。それが目録におけるコロケーション（COLLOCATION, 集中）機能であり、その機能を達成するために典拠目録が必要となる。

しかるに、倉橋氏も指摘するように、典拠目録の作成はアメリカでは一般的であるのに、わが国では殆どの大学図書館が作成していない<sup>40</sup>。学術情報センターが OCLC (ONLINE COMPUTER LIBRARY CENTER) の轍を踏むまいと典拠システムを盛り込んだ総合目録作成システムを開発しているが、参加している大学図書館に典拠目録作成の伝統がないために、典拠レコードの作成は1988年に任意化されている<sup>41</sup>。

典拠目録（典拠コントロール）なしでも特定著者の著書は検索可能であ

る、と異論を唱える大学図書館人もいる。確かに、大多数の著者は一つの表示法と読み方しかなく、そのような著者に対しては典拠コントロールの必要がなく、典拠目録の有無に関わりなく検索結果は同じであり、異論を唱える人の主張も理解できる。典拠コントロールとは、一部の著者であろうと、2種以上の名称や読み方をもつ著者に対して、統一形か相互参照の形で図書館が所蔵するその著者のすべての著書を検索ならしめようというハイレベルの目録技法である。大学図書館においては、蔵書は第一に大学の現行の教育、研究のために構築されるのであるから、たとえハイレベルの技法であろうとも駆使し、利用者の便宜を計るべきである。わが国の大学図書館で典拠目録がないのは、その重要性を認識していなかったからではなく館員が足らなかったからである、と弁護する大学図書館人もいるが、果たしてそうであったか極めて疑わしい。

### 3. 1. 2 主題目録

現在のカード目録や冊子体目録環境の中では、主題目録として分類目録と件名目録がある。そして、わが国の大学図書館の殆どが主題検索のツールとして分類目録を備えている。しかし、一般利用者用のための主題アクセス・ツールとしては、件名目録が分類目録より数倍も優れている。件名目録の利点は、何よりも言葉で検索できることである。件名目録の利用に慣れた人にとって、分類目録は極めて使い難い。わが国の分類目録は実の伴わない（利用の極めて少ない）形式だけの主題目録となっている。換言すれば、「主題アクセス・ツールを備えている」という図書館員の自己満足のための目録となっている。

件名目録に関しては、アメリカでは20世紀初頭より普及し始めている。その普及に、LC（アメリカ議会図書館）の印刷カードの頒布が大きな影響を与えている。オリジナル・カタロギングの際、最も知的能力が要求され

るのが主題分析を必要とする件名標目の付与である。件名標目の付いた LC の目録カードが頒布された時、アメリカの大学図書館が積極的に購入し、件名目録も含めて目録を整備していったことは極めて当然の成り行きであった。しかるに、現在、件名標目の付いた NDL や LC の印刷カードをはじめ、その他のカードも入手可能となっているが、件名目録を作成している大学図書館はわが国では極めて少ない。主題目録はわが国の大学図書館が抱えている大きな課題の一つである。

### 3. 1. 3 オンライン目録

オンライン目録は OPAC (ONLINE PUBLIC ACCESS CATALOG) とも称され、オンライン閲覧目録のことであり、オンラインで目録を作成するオンライン目録作成システムとは異なる。その両者の違いを認識していない大学図書館人も多い。全蔵書をオンライン目録化 (OPAC 化) している大学図書館として筑波大学、金沢工業大学、京都産業大学、兵庫教育大学等の図書館があり、蔵書の一部をオンライン目録化している大学図書館となると、現在 170 館以上存在するものと推測される<sup>69)</sup>。

ある大学図書館の目録がオンライン化されているという場合、通常少なくとも所蔵している資料の大半をオンライン化していることを意味するものと理解されるが、オンライン目録のもう一つの重要な要件は、目録が利用者のためにあるという前提に立てば、利用者用の端末を十分備えるということである。1988年現在、オンライン目録を保有している 38 国立大学図書館のうち、利用者用に 5 台以上の端末を備えている図書館は 4 館、残り 34 館は 3 台未満の端末しか備えていない<sup>69)</sup>。私立大学図書館については、私立大学連盟の調査がありそれによって概観すると、1990年現在、連盟加盟大学 112 校のうち 36 校が OPAC を開発している。そのうち、利用者用に 4 台未満の端末をおいている大学が 20 校、5～10 台が 9 校、11 台以

上が7校となっている<sup>69</sup>。オンライン目録を保有しているアメリカの中規模以上の大学図書館の多くが少なくとも20台、それ以上の端末を利用者用に備えていることは大いに参考にするべきであろう<sup>70</sup>。アメリカとわが国の大学図書館の利用者数は異なるので（アメリカの大学図書館利用率が極めて高いということ）、あまり参考にならないという大学図書館人もいるが、利用者の発掘（潜在的利用者を顕在的用户に変えること）もオンライン目録が担っている機能の一つであることを忘れてはならないであろう。

目録の機能はオンライン目録になっても基本的には変わらない。すなわち、図書館が所蔵している資料をタイトル、著者、主題から検索できるようにすることである。しかし、利用者がタイトル、著者、主題のいずれから検索しようと、オンライン目録はカード目録とは比較にならないほど大きな利点をもっている。その利点を十分に発揮させるためには、しかし、利用者の抵抗を最小限にすべく端末の操作性を考慮し、カード目録以上の利用者指導も必要である。以下に、目録の機能と端末の操作性の側面からオンライン目録を考察する。

目録の機能的側面を考察したヒルドレス (HILDLETH) は、理想的なオンライン目録は次のような機能をもっているという<sup>71</sup>。

- 1) 書名、著者、著者一書名、または、それらの短縮形から検索できる
- 2) キーワードによる検索が可能である
- 3) 著者名典拠ファイルの維持と自動変換により、利用者が意識することなく著者の様々な形（名称）から検索できる
- 4) 典拠ファイルのブラウジングが可能である

また、主題アクセスの観点から目録を考察したマーケイ (MERKEY) は、理想的なオンライン目録を次のように論じている<sup>72</sup>。

- 1) 件名ファイルの中の標目がディスプレイされ、ブラウジングが可能である

- 2) 件名 キーワードがディスプレイされ、ブラウジングが可能である
- 3) 書架分類付き関連件名や件名参照がディスプレイされ、ブラウジングが可能である
- 4) 利用者がキーインする自然語から統制語へ自動的にリンクされる
- 5) 分類表のディスプレイおよびブラウジングが可能である

ヒルドレスの論ずる 1) と 2) 点は、短縮形は除くとして、大体わが国のオンライン目録で実現をみている。3) と 4) 点に関しては、わが国に典拠ファイルの伝統がなく、一部の図書館を除けば、一般的には NACSIS に接続して初めて典拠を維持し始めるという状況である。NACSIS に参加している大学図書館は NACSIS の典拠ファイルをブラウズしながら目録作成を行っているので、その典拠ファイルをローカル・データとして取り込み、利用者用に修正して提供することが可能である。

ヒルドレスはリストしていないけれども、将来のオンライン目録で実現させるべき検索法として、近接演算子による検索がある。キーワードの組合せ検索は、再現率を高めるけれども精度は落ちる場合がある。すなわち、ノイズが多いことがよくある。その時に威力を発揮するのが近接演算である。

JOIS 検索の場合、次の 4 種がある<sup>99)</sup>。

- W : 2つの検索語が入力した順序に隣り合っているもの
- N : 2つの検索語が入力した順序を問わず隣り合っているもの
- S : 2つの検索語が同一センテンス中にあるもの
- F : 2つの検索語が同一フィールド中にあるもの

将来のオンライン目録は、少なくとも JOIS の“F”機能ぐらいは持つべきである。

主題アクセスに関しては、わが国は伝統的に弱く、従って件名目録は十

指で数えるぐらいの大学図書館しか維持していない。そのようなことから、マーケイの論ずる1)～4)点は、それ以前の条件が整備されていないので、現在のところわが国では雲の上の話で考察の対象にさえならない。しかし、図書館がやる気さえ起こせば、件名標目や件名キーワードを付与したオンライン目録を作成できる環境は十分整っている。例えば、NACSIS-CAT では件名標目の付いた JAPAN/MARC, TRC/MARC, US/MARC, UK/MARC 等を参照ファイルとして維持している。それらファイルを利用すれば、資料の相当部分をコピー・カタログングで整理できると推測される。マーケイの第5点は、件名ファイルを維持してないわが国の大学図書館で、主題アクセスという点から最も実現性が高い。関連索引の語句を使って分類表が表示できるようになると、わが国の目録の主題アクセスも相当高まるであろう。

以上、アクセスの観点から考察したが、目録は文献の代替物と言われ、文献の書誌的情報を内容的なものも含めて可能な限り提供する必要がある。特に内容的、主題的な側面を考察したオーデン (ORDEN) らは、これからのオンライン目録は目次も含めるべきだと論じている<sup>6)</sup>。雑誌に限るけれども、金沢工業大学の OPAC では個々の号の目次が見られるようになっている。将来のオンライン目録はそのような内容的な側面も充実させるべきである。目録と書誌の相違の一つは、当然のことながら、目録が所在情報の提供機能をもっていることである。ヒルドレスは、オンライン目録機能の一つに特定資料の入手性 (AVAILABILITY) の情報の提供を挙げている<sup>7)</sup>。それは、具体的には、検索した資料がその時点でどこにあるかの情報、すなわち、書架にあるのか、それとも貸出中なのか、などの情報を利用者に提供することを意味する。

従来、目録は一般的に整理後の情報を提供するものと考えられていた。一部のサービス・レベルの高い図書館では、資料を受入れた時点で発注ス

リップを閲覧目録にファイルし、未整理であるけれども資料は図書館に入っており、必要な利用者には寸借可能です、という態度をとってきた。しかし、目録によって貸出情報を提供するという事は思い及ばなかったし、また、カード目録では現実的に無理なことであった。オンライン目録時代になり、目録は種々の機能を果たすようになってきた。事実、立命館大学のオンライン目録では、貸出情報を提供しているし、雑誌については、新着雑誌の受入状況やロケーションまで表示する<sup>69)</sup>。また、筑波大学図書館では貸出情報はもちろんのこと、利用者は研究者に限られているけれども、発注情報までも提供する<sup>70)</sup>。アメリカの大学図書館のオンライン目録では貸出、発注、受入情報の提供が一般化しつつあることの報告もなされている<sup>71)</sup>。

次に、オンライン目録検索における端末の操作性（ユーザ・インターフェイス）について考察する<sup>72)</sup>。オンライン目録の場合、目録の機能的側面と端末の操作性との境界線は必ずしも明確でないが、端末の操作性についての第1点は、理想的なオンライン目録は検索法にメニュー方式とコマンド方式の両方を備えているということである。大学図書館がたとえ十分な利用指導を行おうと、学生は毎年入ってくるし、それら新入生のためにも少なくともメニュー方式は必要である。第2点は、ファイルを指定せずに一括した検索ができることである。利用者の一般的な理解と異なり、図書館は年鑑や継続刊行されるディレクトリー類を逐次刊行物（雑誌）と規定している。また、現代は翻訳の時代でもあり、原書と翻訳書が同時に検索できるならば、利用者は大いに喜ぶであろう。そのようなことから、ファイル指定なしの検索は重要である。

第3点は、ヘルプ機能が十分備わっていることである。ヘルプ機能が十分備わっているということは、第1に、検索の各ステップで次にどのようなことをすべきか（もしくは、どのようなことができるか）、検索過程の

中で今自分はどこにいるか、それまで検索してきた過程を表示させるためにはどうすればいいか、等を利用者が簡単に分かるように画面に表示しているということである。第2に、検索の如何なるステップにおいてもウィンドーを使ってファイルやコマンドの説明が受けられることである。ウィンドーを使ってのファイルやコマンドの説明については、“UMI DISSERTATION ABSTRACTS ONDISC”システム等に理想的な形を見ることができ<sup>8)</sup>。第4点は、検索結果を種々のフォーマットでディスプレイでき、そしてまた、その検索結果をタイトル、著者、分類等をキーにして、体系順に並べ替えができることである。

以上の他に、ヘルプ機能に入ると思われるものとして、ヒルドレスは、a) 正確な綴りが分からない時に、端末で確かめることができる、b) 検索結果が無の時、近似値の表示や代替策を示唆してくれる、を挙げている<sup>9)</sup>。また、マーケイは主題検索の際のヘルプ機能として、a) 検索結果が無か、少な過ぎる時には、上位件名や関連件名を示唆してくれる、b) 検索結果が多過ぎる時には、論理式、言語、刊行年などで範囲を狭めるよう示唆してくれる、を挙げている<sup>10)</sup>。

オンライン目録がその機能を発揮するためには、目録の利用指導が極めて重要である。わが国の大学図書館で今一番欠けているのが、その利用指導である。利用指導に関しては、別稿で論じているので割愛し<sup>11)</sup>、もう1つの重要な要素である環境整備について言及する。わが国の大学図書館のオンライン目録とアメリカのそれと比べると、2つの分野での環境整備が必要である。最初の分野は、データベースのカバーレジ(量)である。オンライン目録の開発が1980年代に入ってからであるので、蔵書の1部しかデータベース化されてなくとも仕方のないことであるが、しかし、利用者側からすれば、苦勞してオンライン目録の使い方を学んだのに、蔵書の大部分に対してはカード目録を調べねばならないとなると不満が生ずるもの



である。幸いに、いくつかの大学図書館をはじめ、全国的にも NDL や NACSIS を中心に遡及入力が始まっているので、利用者のある程度満足のいくようなデータベース量になるのにそう長くはかからないと思われる。

データベースの量と関連するのがオンライン総合目録である。現代のような多種多様な資料や情報が要求される時代においては、1館で利用者の要求を満たすことは不可能であり、資源共有の考え方が要求される。そのためには、総合目録が必須である。京都大学図書館のオンライン目録は京都北部の6国立大学図書館の総合目録となっており、未来志向型のオンライン目録となっている。理想を言えば、NACSIS に参加している大学のオンライン目録は、検索した資料が自館にない場合、自動的に NACSIS の総合目録にリンクされるべきである。また、アメリカのいくつかの大学図書館ではオンライン目録から雑誌論文データベースも検索できるようになっており<sup>8)</sup>、オンライン目録の性格が変化してきていることも留意しておく必要がある。

第2の分野は端末台数やプリンターの整備である。アメリカの同一規模の図書館と比べると、端末台数は2分の1～3分の1程度である。また、オンライン目録の特徴の一つは通信回線さえあればどこからでも検索できることであり、必要端末の台数を計算する際、そのようなことも考慮する必要がある。なお、キャンパス LAN が整備されている大学図書館では、事務室や研究室からも検索できるようになっている。

端末台数に加えて、備えるべきものがプリンターである。計算機センター等の使用済ペーパーの裏を利用すれば、コスト的には殆ど問題ないと思われる。プリンター付き OPAC の例を、京都産業大学や1990年に開館した金沢大学の中央図書館に見ることができる。プリンターは音が喧しくて他の利用者に迷惑になると言う大学図書館人もいるが、騒音のあまりな

いプリンターも現在では開発されているし、また、たとえいくぶん喧しくても、プリンターの持つメリットはそのデメリットを差し引いてもなお余りあるものがある。オンライン目録はカード目録と異なり、図書館人が分かりやすいと思っけていても、利用者にとっては分かりにくいものであり、利用者の少々の喧しさに対しては寛容の態度が必要である。利用者が少なく、または、席借りだけの学生で一杯の静かな大学図書館よりは、少々喧しくても図書館資料や目録を利用する学生で活気付いている大学図書館の方が、遙かに優れた図書館であると言えよう。

### 3. 1. 4 コンピュータ時代における目録作成

文部省の調査によると、現在少なくとも 200 以上の大学図書館がコンピュータを導入してオンライン目録作成をしている<sup>6)</sup>。また、J-BISC や Bibliofile を利用してオンライン目録作成をしている大学図書館も存在する。このように、コンピュータを介しての目録作成は、わが国でも徐々に一般化しつつある。

コンピュータを利用した目録作成は、次のように類型化できる。

- |           |   |                                    |
|-----------|---|------------------------------------|
| 個別目録作成—   | { | a) 完全な自館作成型(オリジナル・カタログ)            |
|           | } | b) MARC や CD-ROM を利用した目録作成型        |
| 共同分担目録作成— | { | c) 海外の書誌ユティリティ利用型 (Utlas や OCLC 等) |
|           | } | d) NACSIS-CAT 利用型                  |

上記の 4 類型を比較検討すると、完全な自館作成型は最も望ましくないパターンである。外部の書誌データを利用するよりは自館で作成した方が早い、というのがこの型に属する図書館の言い分であるが、果たして外部データと同質の目録が作成できているのか、大いに疑問が残る。

b) 型は NACSIS-CAT が開発される以前に機械化している図書館に

多い。また、この型に属する図書館の中には、J-BISC や Bibliofile 等の CD-ROM の普及により、書誌ユティリティに参加することの意義を認めない図書館もある。c) 型、すなわち、Utlas や OCLC 等の外国の書誌ユティリティに参加して目録作成の省力化を計っている大学図書館は、同志社女子大学をはじめ10数大学にのぼる。

d) 型、すなわち、わが国唯一の書誌ユティリティである学術情報センターの目録作成システムに参加して目録作成を行なっている大学図書館は、1991年4月現在140館を超えている<sup>68)</sup>。将来は、NACSIS-CAT に参加しながら、洋書に対しては Utlas や OCLC 等に参加して、目録作成の省力化を計る図書館が出てくる可能性もある。

外国と自国の書誌ユティリティを比較すると、Utlas や OCLC は NACSIS-CAT とは比べられないくらいの大規模のデータベースを保持し、そして、東アジア言語で書かれた資料の目録作成システムも開発中（もしくは、開発済）であると言われている。そうすると、目録作成の省力化という観点からは、NACSIS-CAT より数倍もベターな書誌ユティリティになる可能性がある。また、Utlas や OCLC 共に自分のデータベースを CD-ROM でも利用できるようにしているので、そのメリットはますます大きくなる。しかし、わが国の書誌ユティリティ〈NACSIS-CAT〉は、外国の書誌ユティリティが有していないメリットもっている。

学術情報の量的増大、質的多様化が起こっている現代において、研究者の情報要求に的確且つ迅速に応えるためには、大学図書館はシステム化と資源共有の思想が要求される。それを実現するために、すなわち、個々の大学図書館の枠を越えた資源共有ネットワークを構築する目的で設立されたのが NACSIS である。

書誌ユティリティの活動の結果、総合目録ができあがるが、NACSIS の場合は接続館の目録業務の省力化だけでなく、それ以上に、学術情報流通

システムの一環としての全国的総合目録の形成に重点をおいている。それ故、NACSIS-CAT に参加すべきか否かを決定する際には、自館の目録作成の省力化という観点からだけでなく、「総合目録作成に寄与し、ILL システムの1館となるメリット」という観点からも思慮すべきである。

### 3. 2 分類

分類には配架分類と書誌分類がある。資料の配架を目的とした分類が配架分類であり、資料を主題からアクセスするためのツール作成を目的とした分類が書誌分類である。分類目録は1種の書誌分類である。わが国では分類を配架分類と書誌分類の両目的に使用している。また、主題アクセスのツール、すなわち、主題目録としては分類目録の他に件名目録が存在するが、わが国の大学図書館では件名目録は殆ど存在せず、分類目録が圧倒的に多い。

JLA の調査によると、洋書に対して DC (デューイ十進分類法) を使っている大学図書館が40館存在するが、殆どの大学図書館は NDC (日本十進分類法) を採用している<sup>69)</sup>。アメリカの大学図書館では DC または LCC (アメリカ議会図書館分類表) が使われているが、それらの分類は配架分類としてのみ使用されているところに、わが国との大きな相違がある。

分類目録を主題アクセスのツールとして整備する際には、分類の重出や分出をする必要がある。最近、複数の主題を含む図書も多く刊行されるようになってきている。その種の資料に対しては、それぞれの主題ごとの重出記入を作成する必要がある。また、一括分類をしている全集、講座もの等に対しては、文学作品やその他の特殊の例を除いて、通常そのセットの中の個々の著作に対して分出記入を作成する必要がある。JLA の調査によると、全体の半数近くの大学図書館が分類重出をしていない<sup>69)</sup>。分出記入についても同様であろうと推測される。

また、分類目録を真の主題アクセス・ツールたらしめるためには、件名索引を作成する必要がある。具体的な例をカード目録で挙げると、NDCを採用している図書館は「相関索引」の中から自分の図書館の蔵書と関連のある用語を抜き出し、カード化し、分類目録の中にファイルする訳である。わが国では、そのような件名索引を作成している大学図書館は極めて少なく、「相関索引」を複写して分類目録の周辺においたり、NDC そのものを分類目録の上においたりしている図書館が多い。

件名索引は分類表の相関索引と基本的に似ているが、件名索引は実際に作成した分類記入のみを索引の対象とするという点で異なる。NDCの相関索引を件名索引の代わりに使っている図書館では、現物は所蔵していないのに索引を作成しているということが起こり得る。また、大学図書館が所蔵する資料の中には固有件名と関わる資料も多い。固有件名は通常相関索引の中に含まれていないので、自館で作成する必要がある。そのような訳で、相関索引をそのまま件名索引として使うことには問題がある。

欠陥商品とも呼ぶべきそのような分類目録に対して、何故利用者から苦言が出ないのだろうか。それは、閲覧目録が利用者のための目録でありながら、わが国の分類目録は利用の極めて少ない形式だけの主題目録になっているからである。

目録規則と同様、分類法には変更が付きものである。学術の進展は学問を専門化、学際化させている。その学問の変化や社会の推移により、図書館の分類法は度々の改定を余儀なくされる。NDCが約10～15年ごとに改定を行なって現在第8版となり、NDCの基になっているDCが現在第20版を重ねているのは、分類法の一種の宿命ともいうべきものである。

大学図書館は採用している分類法が改定されるごとに、その対応策に迫られる。実際は、新しい主題を含んだ資料が頻繁に蔵書に加えられるので、改定版が刊行される前から個々の図書館は使用している分類法に独自

の追加、改定を施している。図書館が独自に施した修正と新しく刊行される改定版が大方一致しておれば、改定版への移行はスムーズにいくが、一致しないのが一般的である。さらに、わが国の大学図書館では分類を配架と検索の両目的に使っているので、改定版への移行となると、資料のラベルの変更と目録カードの訂正が必要になる。そこに、分類の維持・管理の難しさがある。

しかし、オンライン目録が普及すると、主題アクセス・ツールとしての分類ファイルの維持、更新は比較的易しくなる。(配架分類の更新に関しては、今のところ見通しは暗い)。配架用の分類と分類ファイル用の分類を別個の書誌要素として入力すればよい。そして、改定版が出た時変換テーブルを作成し、分類ファイルの番号だけ変換すればよい。その方法により、一貫した最新の(UP-TO-DATEな)分類ファイルを維持することが可能となる。

#### 4. 結 び

以上、大学図書館における資料の組織化について考察した。要約すると、以下のようになる。図書館で資料の組織化という場合、資料の物理的組織化と検索ツールの組織化に大別できるが、物理的組織化の面では多様な情報メディアの出現により、形態別組織化が必要になってきている。図書以外の重要な資料として逐次刊行物があるが、その配架法にはいくつかの問題点が存在する。閉架制と開架制についても論じ、全体的に開架の方に向いていることも明かにした。

検索ツールの組織化については、最初に目録を取り上げ、カード目録環境では著者(名)目録と主題目録の問題点を指摘した。つぎに、やがて一般化するであろうオンライン目録について言及し、カード目録と比較し

場合のオンライン目録の特徴を論じた。しかしまた、オンライン目録がその特徴を発揮するためには、インターフェイスや利用指導をはじめ、種々の環境整備も必要であることを指摘した。

コンピュータ時代における目録作成については、完全な自館作成型、MARC等を使った自館作成型、海外書誌ユティリティ利用型、NACSIS-CAT利用型が存在するが、ILLのことを考慮すると、NACSIS-CATにメリットがあると論じた。

最後に分類について考察し、わが国の分類目録は重出、分出も十分作成されておらず、件名索引も不十分であり、形だけの主題目録となっていると論じた。分類の更新については、わが国の大学図書館のように、分類を配架とアクセスの両方に使っていると難しいけれども、オンライン目録環境で分類を2種の書誌要素として入力することにより、分類ファイルの更新が比較的容易に行なえることを指摘した。

## 注

- (1) 因に、『新図書館学ハンドブック』（岩猿敏生ほか編 雄山閣、1984）によると「受入」まで含み、『図書館情報学ハンドブック』（丸善、1988）によると「選書」や「保存」まで含むことになっている。
- (2) Hyman, R. J. *Shelf Access in Libraries*. ALA, 1982, p.25-29. また、受入順配架から主題別配架への歴史は、固定式配架から移動式配架への歴史として捉えることも可能である。
- (3) 1991年6月現在口頭で問い合わせたもので、所蔵点数は1万点である。全資料を自動提供できるようにシステムを変更中ということである。
- (4) 『京都産業大学中央図書館利用案内 1989-90』京都産業大学図書館、1989。『京都産業大学図書館年報』10号（1991）。
- (5) 阪田蓉子 「大学中央図書館における対学生サービスの史的変遷」（上）（下）『図書館学会年報』34巻4号（1988.12）、p.178-184；35巻1号（1989.3）、p.8-35。
- (6) 『日本の図書館』（1990年版）日本図書館協会、1990。分館を有する大学図書館については、主に中央館のみを対象とした。
- (7) 岩猿敏生 『大学図書館』雄山閣 1976（日本図書館学講座6）、p.123。

- (8) 文部省管理局教育施設部「大学図書館施設計画要項」所収：岩猿敏生『大学図書館』op. cit., p. 261-288.
- (9) 冊数は1989年3月現在、各大学図書館に口頭もしくは封書で問い合わせたものである。
- (10) 浜瀬善雄「大学図書館の充実を目指して——学習用図書のリフレッシュを中心として」『私立大学図書館協会会報』88号(1987. 6), p. 123-128. なお、関西大学では、閉架書庫にある資料のうち、学生の利用度の高い資料は学生用として重複購入しているようであるが、それが必ずしも最善の策とは限らない。資料費にあまり余裕のない図書館では、研究用資料も必要とあらば閉架図書室に置くという発想の転換が必要である。
- (11) 倉橋英逸「大学図書館における現状と将来——国・公立大学の場合」『現代の図書館』20巻1号(1982. 3), p. 20-25.
- (12) 「目録システムの仕様改定」『学術情報センターニュース』no. 6(1988. 3), p. 20-24. OCLCは現在最大規模のデータベースをもつ書誌ユティリティであるが、典拠システムを導入しなかったため10-20%の重複レコードが存在すると推測されている。そして、現在、OCLC, RLIN, WLN, LCを参加館とするLSPプロジェクトにより、その重複レコードの排除に努力している。
- (13) 文部省学術国際局学術情報課『平成2年度大学図書館実態調査結果報告』同学術情報課 1991. なお、ここで全蔵書という場合、文字通りの全蔵書ではなく、特殊資料や特殊言語で書かれた資料を除いた一般蔵書のことを指す。
- (14) 国立大学図書館協議会学術情報システム特別委員会『目録情報ネットワークの展開と大学図書館のシステム化』1988, p. 66. (未刊資料)。具体的な数字は把握できないが、『平成2年度大学図書館実態調査結果報告』(op. cit.)により状況は現在改善されていることが分かる。
- (15) 日本私立大学連盟調査委員会『平成2年度大学図書館実態調査』同調査委員会, 1991, p. 338-341. なお、11台以上7校のうち、立命館大学が31台、早稲田大学が35台と突出している。
- (16) *American Library Directory*. 1990/91 ed. Chicago, ALA, 1990. 因に、学生数約1万1千人、蔵書約80万冊を有するボストン・カレッジの図書館は全蔵書をオンライン化してカードレスになっているが、筆者が1987年に訪問した際利用者用に30台の端末をおいていた。そして、上記の *American Library Directory* によると、現在、60台おいている。スタンフォード大学(学生数約1万3千人、蔵書約530万冊)を訪問した安達氏は、53台の端末を利用者用に備えていたと報告している。(参照：安達淳「米国の図書館の印象」『学術情報センターニュース』no. 3(1987. 1), p. 8-14.



- (17) Hildreth, C. R. "Pursuing the Ideal : Generalizations of Online Catalogs," in : Verey, B. and Butler, B. ed. *Online Catalogs, Online Reference* (Chicago, ALA, 1984, p. 31-56).
- (18) Markey, K. "Users and the Online Catalog," in : Matthews, J. R. ed. *The Impact of Online Catalog* (N. Y., Neal-Schuman, 1986, p. 35-69).
- (19) 『JOIS 入門』 日本科学技術情報センター, 1990, p. 29.
- (20) Orden, R. V. "Content-Enriched Access to Electronic Information : Summary of Selected Research," *Library Hi Tech* 8 : 3 (1990), p. 27-32.  
Mandel, C. A. and Herschuman, J. "Online Subject Access—Enhancing the Library Catalog," *Journal of Academic Librarianship* 9 : 3 (July 1983), p. 148-155.  
Cochrane, P. A. "Modern Subject Access in the Online Age," *American Libraries* 15 : 6 (June 1984), p. 438-443.
- (21) Hildreth, C. R. op. cit.
- (22) 『RUNNERS : 立命館大学学術情報システム概要書』 立命館大学図書館 1990.
- (23) 熊谷俊夫 (他) 「筑波大学附属図書館のオンライン図書請求システム」『情報管理』 31巻 2号 (1988.5), p. 127-142.
- (24) 黒田晴雄 (他) 「北米における目録所在情報形成システムの調査」『大学図書館研究』 34号 (1989.6), p. 16-40.
- (25) ユーザ・インターフェイスの詳細な論点については、次の文献を参照。  
Kaplan, D. ed. "Online User Assistance : A Symposium," *Library Hi Tech* 8 : 1 (1990), p. 65-84.
- (26) *Disseration Abstracts Ondisc User's Guide*. Ann Arbor, UMI, 1988.
- (27) Hildreth, C. R. op. cit.
- (28) Markey, K. op. cit.
- (29) 大城善盛 「大学図書館における利用者サービス」『人文学』 149号 (1990.9), p. 20-43.
- (30) *Information Technology and Libraries* の vol. 8, no. 2 (June 1989) はローカルなデータベース 搭載特集号になっていて、その中にバンダビルト大学 (Vanderbilt University) やダートマス大学 (Dartmouth College) 等における雑誌論文データベースのオンライン目録化の事例紹介がある。
- (31) 文部省学術国際局学術情報課 『平成2年度大学図書館実態調査結果報告』 op. cit.
- (32) 『学術情報センターニュース』 No. 16 (1991.6)

- 63) 岡田靖 「『図書の整理に関する調査 1989』の集計報告及び分析」『現代の図書館』28巻2号(1990.6), p.116-126.
- 64) 岡田靖 「図書の整理に関する調査報告」『現代の図書館』20巻2号(1982.6), p.111-127.